

# 住まいとコミュニティづくり活動助成 2014 東京交流会の記録

2014年8月23日(土) 浜離宮朝日ホール小ホール

10:30~11:15

## 「活動の継続のあり方」事例紹介

これまでの助成対象活動では、様々な施設を活用しながら、居場所づくりや活動の拠点とするものが多く見受けられる。そこで、今回開催した座談会では、過去に助成した団体のうち、こうした活動を現在まで継続している団体に集まつていただき、「活動の継続のあり方」について報告していただいた。

各団体の報告の後、小林郁雄氏(前選考委員長)をコーディネーターに、鈴木輝隆氏(現選考委員長)をコメントナーとして参加いただき、「活動の継続のあり方」をテーマに、パネルディスカッション形式で議論を深めた。



事例紹介①

[2008年度助成／豊島区]  
**NPO法人まちづかい塾**

[報告者]五十嵐洋子氏

[活動報告の要点]グリーンとアートをテーマに、廃校の校庭での畑づくりを通じて多世代の交流を醸成してきた。2016年に現在使用している拠点が仮校舎として使用されることになったため、畑の存続が難しくなった。メンバー間で、移転するまでは現在の活動を継続して楽しもうという合意に至っている。また、活動の運営をNPOから地域住民へバトンタッチすることも検討している。



事例紹介②

[2007・2010年度助成／岡山市ほか]  
**NPO法人芸術家と子どもたち**

[報告者]藤本まりこ氏

[活動報告の要点]まちを使って賑わいを創れるような人の育成を行ってきた。公園のオープンカフェで使用していた機材庫は、現在真庭市で活用されており、牛窓地区の空き家を改修して設けた地域の茶の間は住民が運営継続中。今後、学童保育や絵本サークルの拠点の開設を検討している。何をするにしても肝心なのは人であり、自力で運営しないと継続できない。



事例紹介③

[2007・2011年度助成／高知市]  
**NPO法人蛸蔵**

[報告者]竹村直也氏

[活動報告の要点]初代の蔵と道を隔てた蔵庫群の一つを、映画・演劇・音楽・美術の4団体で多目的ホールとして運営しているが、周囲からの苦情もあり一時休館し、赤字に転落。現在、受付や施設管理を担当してもらえる劇団が旗揚げし、貸館増加への対応が可能になりつつある。今後は採算と各団体のこだわりをどう調和させていくかが良好な経営のカギを握ることになりそう。

11:20~12:00

## 座談会「活動の継続のあり方」

コーディネーター／小林郁雄(兵庫県立大学教授) コメンテーター／鈴木輝隆(江戸川大学教授)

●財団の助成のあり方として、それぞれの活動への助成だけではなく、活動団体をネットワークしていくことへの支援もありうるのではないか。ネットワークは大きな力になる。悩みを話し合う場があると力づけられる。継続とは同じことをそのまま続けることだけではないと、改めて考えさせられた。

●個別の活動を相談できる人がいないので、交流会のような集まりはありがたい。情報の送受、他の事例を自分たちの活動に活かすことができる。



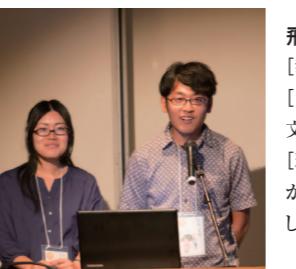
●実際に活動してみると見通しと違ってくるものだ。社会情勢や環境や状況の変化等、信念と行動の矛盾が起きる。行動を変えると一貫性がなくなるのではないか、信頼を失うのではないか、支援してくれる人が離れるのではないかと心配して、同じことをそのまま続けていっているのは逆に信用を無くすことにつながる。状況の中で工夫して生きていくことが一番重要なマネージメントではないか。継続にはコストとリスクがかかる。工夫次第でお金を出したいという企業が出てきた例もある。人の心をつかまえることがマネージメントで、つかまえなければ継続できない。

●まったく違った分野の人と会うことを心がける、境界を超えることで問題を打破できるのではないか。色々なことの可能性があるのに、これまでの殻に閉じこもって見えなくなってしまってはいけない。全く違ったことの中に自分のやっていることが生きてくるのは、こだわりを捨てることではなく、新しいことが生まれる・生きることなのだ。

13:00~17:00

## 活動報告会

### 昨年度の助成対象団体の活動報告



飛島ロマン(山形県酒田市)

[報告者]松本友哉氏／小川ひかり氏

[活動のテーマ]飛島拠点プロジェクト02～飛島に文化の拠点をつくる～

[現況報告の要点]島に集つたUIターンの若者たちが空き家の改修を行つた〇歴史・文化を0次産業として位置づけ活用する



チームPREドクターズ(奈良県橿原市)

[報告者]峯昌啓氏

[活動のテーマ]地域復興救急科～医学生がつくる地域コミュニティ拠点～

[現況報告の要点]医大生が町屋の改修を行い、学習塾などで活用〇常時開設には住民とのかかわりが欠かせない



元気！岩手つちざわチーム(岩手県花巻市)

[報告者]松葉孝博氏、千葉良成氏、猿祐祐子氏

[活動のテーマ]子どもたちが誇れる未来の土沢商店街プロジェクト

[現況報告の要点]作り手と売り手が連携した特産品づくり〇人が地域ブランドになる〇定住や雇用を生む地域力の増進



荻ノ島地域協議会(新潟県柏崎市)

[報告者]春日俊雄氏

[活動のテーマ]学生と地域の協働による茅葺きの空き家の再生・再活用

[現況報告の要点]茅葺き空き家の解体、修復。村の景観の保全〇学生との協働により村の空気が変わった



### 今年度の助成対象団体の現況報告

きよさと移住者ネット(北海道清里町)

[報告者]鳥居直也氏

[活動のテーマ]伝統地場産業「アブラギリ」の復活を通した地域コミュニティの場づくり

[現況報告の要点]住民ゼロ集落のコミュニティづくり〇高校等多団体と連携してアブラギリを活かした産業創出



NPO法人WACおばま(福井県小浜市)

[報告者]鳥居直也氏

[活動のテーマ]伝統地場産業「アブラギリ」の復活を通した地域コミュニティの場づくり

[現況報告の要点]住民ゼロ集落のコミュニティづくり〇高校等多団体と連携してアブラギリを活かした産業創出



NPO法人 えき・まちネットこまつ(山形県川西町)

[報告者]高橋美穂氏、江本一宏氏

[活動のテーマ]イザベラとひさしの町が蘇るツインタイムトラベル

[現況報告の要点]イザベラバードと井上ひさしを地域活性化の起爆剤として、彼らのゆかりの古道の復元やまちなみ巡りなどを実施中



かやの木会(三重県熊野市)

[報告者]久保智氏

[活動のテーマ]古民家を拠点とした過疎山村地域と大学の交流による地域創造

[現況報告の要点]連携する大学と方向性を確認しながら、山村文化の伝承を目的とした調査やHP、イベントを準備中



ぐるぐる海友舎プロジェクト実行委員会(広島県江田島市)

[報告者]南川智子氏

[活動のテーマ]築百年的洋館“海友舎”の再生からはじまる記憶の継承

[現況報告の要点]高齢者へのヒアリングなど、これまでの暮らしや文化を掘り起し、海友舎を軸とした地域の魅力を発信する冊子を作成中

# 選考委員のコメント

助成対象団体の活動報告を受けて選考委員にそれぞれの団体についてのコメントをお願いした。

最後に、選考委員長の鈴木輝隆氏に全体を通じたコメントをいただいた。



## 遠藤幹子氏

選考委員/Mother Architecture 代表理事

[担当]飛島ロマン、龍野町家再生活用プロジェクト  
飛島も龍野も、外部から来たデザイナーや建築家  
が重要な役割を担っている。最近はそういう専門性を持つ人が従来の領域を超えて、第三の居場所を求めて地域活動に関わることが増えている。互いのノウハウを共有することで、様々な問題が解決されてゆくのは嬉しい。

例えば広報や経営など、メンバーで担いきれない作業は是非プロボノに頼って欲しい。

そのためには、他者が「強く共感でき」、「そこにしかないオリジナリティがあること」が大切。その活動を社会の財産として「守りたい」と思わせ、モチベーションを駆り立てるプロモーションができるれば、より広く賛同者や協力者を集められる。それによって、地域だけでは解決できない問題を、もっと前に進められる。

活動の実態は現場を見ないとわからないが、多くの人に生の実体を伝えられるよう、ぜひFBページや動画などを使い、効果的に発信して頂きたい。

でも親や先生以外の大人と触れ合う機会は貴重である。最後に、お寺がコミュニティ拠点であることを。ショッピングセンターのプレイヤーが遊び場という時代に、豊かなオープンスペースを持つ地域のお寺がコミュニティの拠点になっており、さらに地域に開いてくださるお寺が他にも広がっているのはすばらしい。

プレドクターズは、医大生が100%運営していることが特徴。一般に学生と地域の関わりは限定的であるが、町家を拠点に学生が積極的に地域とかかわっている。特に寺子屋はまさに、医大生の特技を生かした魅力的な活動だ。食堂の営業日が縮小したようだが、学生の本業は学業であるし、それに、寺子屋に通う子どものお母さんが企画などに関わるなど、結果的にはかえって、地域に開かれた拠点となりつつある。



## 図司直也氏

選考委員/法政大学 准教授

[担当]ななしんぼ、元気!岩手つちざわチーム、荻ノ島地域協議会  
ななしんぼは、土沢、荻ノ島地域協議会とも、過去に行政主導で地域づくりが活発だったところが、市町村合併を経て行政だけでは手に負えない状況に陥り、どのように基盤を作り直していくかという点が共通していると感じた。

ななしんぼは、大きなビジョンを皆で出し合い、どのようなスタートを切るか洗い出したところが大きい。地域の木材、林業への関心や技術がある地域内外の人々が定期的に講座で集い、交流の人の厚みや幅の広がりが生まれていったのだと思う。今後どのようなソフトを入れるかが大切。

荻ノ島地域協議会は、地域の技術や素材をどのように活かすかという観点から、学生と地域住民が協力し合い茅葺き家屋をおなしていいる。建物をなおすことを目的としながら、結果として地域の空気や人の気持ちへと広がっていった点にひかれる。

アートレジデンスとしてどのようなコンテンツを入れていくのかが大切。

土沢は、同じ悩みを共有しながら農家と商店がつながったところが特徴的。大山商店街で物産を売るだけでなく商店街同士の交流を行うことで、新しい土沢なりの視点や素材が磨かれるところが見受けられるのは頼もししい。

中間支援組織的な活動もあるが、ネットワークを図るだけでなく自らも活動している点に、モデル性を感じる。行政ではない立場でかかわり、雇用や産業で多くの市民を巻き込む複合的な活動は、そこでしかるものといえる。

言語だけでは表現しづらい地域文化に即した活動では、絵という訴求力のあるコンテンツを活用して、その普及・発展に寄与している点も特筆に値する。



## 鈴木輝隆氏

選考委員/江戸川大学 教授

マスコミが報じるメジャーな事象に世間の耳目が集まることが多いが、本日の報告のようなマイナーかもしれないが地域には必要で人間味豊かなことが大切で、ほっとする小さいところに目を向ける時代が来ていると感じた。

活動現場を訪れるときの親切、丁寧に案内してくれる。親切で丁寧な人たちの活動でなければ地域の人の信頼を得られない。

昔は空気を読み、同じテンションを共有しなくてはならないという圧迫感のある雰囲気があった。今はそれと違い、空気を読むのではなく、みなさんが空気をつくって、どうやってみんなでやる気を出すことができるかを考えながら、不確実性があることを前提にして、現実的な折り合いをつけながら活動している。

国宝だ、世界遺産だと外から認定されるのではなく、みなさん自身が自分たちで地域の価値を判断し、希望をつくっている。

地域・まち・県を超えて、これまでのコミュニティに豊かなソサエティを創造して、妄想や夢を加味している。たとえば何の変哲もない空き家を自分たちの宝と捉えて、自らが価値を決めて自らが修理して愛して活動している。

人を集め、にぎやかにするというこれまでの地域活性化とは違ってきた。龍野町でも八木町(プレドクターズの現場)でも落ち着いて、安らぎや癒しがあり、自然に人が集まってくる。マイナーかもしれないが小さい温かいところに目を向ける時代になってしまった。

デザインの良い報告書があると、活動している人は自分のやってきたことが間違いかなかったと思えるし、助成対象に選んでよかったと確認できるので、これからも記録づくりはぜひ続けてほしい。



## 小伊藤亜希子氏

選考委員/大阪市立大学 教授

[担当]ぶうめらん、チームPREドクターズ

ぶうめらんには、他にはないすてきな特徴がある。第一に、お母さん自身が運営にかかわり、様々な力を活かせる場になっていること。その点をさらに充実していかれたらよいと思う。第二に、ばあばスタッフがいること。子育てをやりとげた人に「大丈夫よ」と言ってもらうだけで安心できるもの。子どもにとっ

## 追記

### 荻ノ島地域協議会の報告を受けて

「荻ノ島地域協議会」春日俊雄氏の活動報告の中で、「学生との協働の中で地域の雰囲気が変わった」という指摘が行われた。他団体でも、あるきっかけで地域の雰囲気が大きく変わることがあると考えられる。そこで、今年度の報告団体に「いつごろ、どのようにして地域の空気が変わって活動が動き出したか」についてヒアリングを行い、3団体から報告していただいた。

#### 「NPO法人高田瞽女の文化を保存・発信する会」の場合

上越市高田地区で、市民主体のまちづくりに踏み出されたのは、今から10年前。既に、中心市街地の活力低下は大きな課題でした。丁度、上越市が「歴史的建造物を活かした市街地活性化」に取り組む専門部署を設置して、手始めに官民共催の町家公開が始まりました。市のお金付きがあると「それじゃ協力しますよ。」と地域住民も賛同し、ある種の活気が生まれました。10年を経て市の施策の重点は移り、公開する町家の数は減っても、継続しています。この間、公共施設の高田小町整備とNPO主導の高田世界館再生で、人の動きが目に見えて変わってきました。イベント開催、総合学習支援、報道記事にインターネット、普段の口コミもずっと続けています。当初の「面白いこと始めたね」から、「よく頑張ってるね」という支援の声も聞こえます。

6年前、瞽女の美術コレクション寄贈公開を目指して署名運動を始めた時に、私たちは決意したのです。「行政にお願いでは実現できない、市民から力を集めよう」と。この覚悟が、多くの無言の人々に漫透している。ご寄付をいただきながら、今それを実感しています。

#### 「NPO法人釀造の町 摂田屋町おこしの会」の場合

やはり、多くの方のご意見や支持が大きかったと思います。もともと知る人ぞ知る存在ではあったと思いますが、活動を進めていく過程で、地域の個性や特異性の存在を知ることができました。新聞で紹介されたり、いろんな人のお話をつかがつたりして、保存の価値が十分あり、やり方により実現可能なだといふ自信につながったと思います。東日本鉄道文化財団という影響力のある組織が価値を認めてくれたことも大きかったと思います。そして何よりも多くのボランティアに活動を支えていただいていることに意味があると思っています。

存在さえも知らなかつたのにボランティアに参加して摂田屋の虜になっていく方が大勢いらっしゃいます。現在機那サフラン酒本舗の保存が最大のテーマとなっていますがその姿が徐々に明らかになり、訪れる方が急激に増えています。観光インフラが全くない地域ですので、一NP Oではなかなか解決がむずかしい課題をかかえておりますが、支援者の拡大やネットワークの拡大を急がなければならぬと思っています。

#### 「NPO法人龍野町家再生活用プロジェクト」の場合

歴史的まち並みが現存する龍野川西地区で、歴史的建造物が適切なメンテナンスをされずに老朽化し、取り壊され空地化するといったケースが増加している現状課題をふまえ、龍野地区まちづくり協議会(地元住民)は、さまざまな形で保存を呼びかけています。また、建築物と芸術の相乗効果を狙ったアートプロジェクトや空き町家を利用したオーダムフェスティバルなど住民によるイベントもあります。地元の高校も地元と協働し、高校生が歴史的建造物への愛着とその保存等の取り組みに興味を持ち、職業として考えらるよう課外授業を実施しています。歴史的建造物に実際に触れることで、普段職人の仕事を見たり、意見を交換したり職能の説明を受ける機会の少ない高校生が興味、関心を示し、伝統技術、伝統工法を学ぶことで歴史的建造物の見方が変わり愛着もわいてきました。若い手を育成していくながら、課外授業が交流の場となっています。若い手を育成するためには、歴史的建造物の所有者や地域住民の協力等により、技術習得等の活動を継続的に支えていくとともに、地域で歴史的まち並みの保存と活気ある地域づくりに取り組むことが必要です。高校生は自主的に動き始め、住民は声を掛け合い集まり始め、保存活動を通じてやわかに素直な気持ちでまちづくりに取り組み始めます。お互いの距離感が縮まり、高校生がまち並みの接着剤となり、歴史的なまち並み保存に向けて新しいスタイルをつけています。

### 参加者から寄せられた質問と回答

交流会終了後、当日参加された方から、報告団体に対していくつか質問が出された。このうち「芸術家と子どもたち」及び「飛島ロマン」に対する質問と回答は以下の通り。

#### ○「NPO芸術家と子どもたち」に対する質問と回答

Q.2012年度以降財源を確保できていないのはどうしてですか。

A.事業の性質そのものにも、財源確保を困難にした理由が色々あるかと思います。アートを特徴とした、他にはない魅力を維持するためには苗や土代以外の相当な資金を必要としますが、団体の理念と事業の目的からして、多くの参加費を集めることは絶対にしたくないということでした。助成金の多くはスタートアップ期間への支援が多く、活動を続けるほど申請できる助成事業が少なくなっています。自然体験活動のように、申請段階で予め活動内容を固めてしまうのも「メンバーの意向を反映していく」事業のスタイルにあわなくて、活動を継続すればするほど、メンバーとのコミュニケーションが増せば増すほど、実情にあう助成金は見つからなくなりました(その点、H&C財團さんの助成は「コミュニティづくり」という点で助成をいたしましたが大変ありがとうございました)。

そんな事情があり、2010年頃より企業協賛の獲得を試み、強い関心をもつてくれた企業もありましたが、2011年の大震災の後、企業の支援は被災地へと向けられ没になりそれ以降は団体の予算で切り盛りしている状況です。

補足として、ですが、豊島区や東京都などから協賛を得ることも可能としてはあります。そうすると当然区や都の様々な思惑を優先せざるを得ない事態になり、本当の意味で住民が楽しめながら交流できる環境が損なわれてしまうのではないかと考えています。

Q.何をもってメンバーと定義づけていますか。

A.メンバーからは参加費をいただいている。入会金/1000円(一世帯) 年会費/親子ペア2000円(一人追加+600円)、大人一人2000円

豊島区との契約は「校舎と体育館」の管理運営で、校庭は含まれていないので一般的な方が誰でも自由に入りやすいスタイルにはできないため参加費をもって運営しています。

Q.グリグリを��けたくないと言った人はいましたか。

A.そういう方は一人もおりませんでした。新規で入られる方には

「あと2年の予定」とお伝えしていますが「残念」と言いつつ、丁寧の上来てください。

Q.子どもがいない世代には足を踏み入れにくい(関わりをもちにくく)ところがありますが、そのような人々も取り組むようなことをされていますか。

A.発信する際に気をつけているのは、「大人も子どもも関係なくづくりをしている」という点です。多くの方が、「親子できる」と勘違いしてしまうのでそういう場ではないことを伝える意識しています。実際、大人のみで参加するのではなく、親子単位ではできるだけ活動せず、大人も子どもも全部ひらくめて、興味があるかないか、やりたいかやりたくないかで活動をしていることを理解してもらえるようです(日々の小さなやり取りや声かけから、スタッフがそこを意識して運営をしています)。現在は、20代~40代の女性が各一名ずつ参加されていますが、子どもが好きな人だけでなく、子どもに触れる機会がないのですぐに刺激的、という方もおられます。

#### ○「飛島ロマン」に対する質問と回答

Q.不便な離島に住むと決意したのはどうしてですか。

A.都会は便利だと思いますが、島を不便だと感じたことはほとんどありません。そこにあるものはあるし、しないものはないのが当たり前といった感じです。そして、住もうと決意したというよりも、楽しいからもっと居ようという気持ちです。

Q.通常の日々はどのような一日を送っていますか。

A.自分たちの事業や仕事を進めています。島の人から手伝いを頼まれたり、色々と貢ったりといったこともあります。

Q.次産業の概念についてもう少し詳しく教えてください。

A.若者たちで運営している「合同会社とびしま」では島に雇用を生むために6次産業化を目指しています。しかし仕事を作れば何でも良いということではなく、地域の歴史や文化をきちんと理解した仕事を作りたいと考えています。そのため、産業のベースとして、産業になり得る前の0次産業(歴史と文化の保存・発信活動)という言葉を作りました。稼ぐことも大事で、歴史や文化を大切にすることも大事で、その両者を結ぶ言葉だと考えています。